

メアリ・シェリーの  
『最後のひとり』における両義性  
—— 語りの再構築と癒し ——

細 川 美 苗

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第34巻第2号 (抜刷)  
2015年3月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 34 No. 2 March 2015

# メアリ・シェリーの 『最後のひとり』における両義性

—— 語りの再構築と癒し ——

細 川 美 苗

メアリ・シェリー (Mary Shelley 1797-1851) の『最後のひとり』 (*The Last Man* 1826) は 1824 年 2 月から 1825 年 11 月にかけて書かれたものである。メアリ・シェリーは 1815 年に出産後まもなく女兒を亡くし、その後 1816 年にはウィリアム、17 年にはクララを出産するも、1818 年 9 月にクララ、翌年 6 月にウィリアムを亡くしていた。1822 年 6 月には自身も危うく流産で命を落としそうになるが何とか一命を取り留めた喜びもつかの間に、翌月に夫パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822 以降パーシー・シェリーと表記) が共に滞在していたイタリアで溺死した。その後、1819 年 11 月に生まれて唯一生き残った息子であるパーシー・フローレンスを連れてイタリアから母国へ戻ったメアリ・シェリーが、ロンドンで憂鬱な気持ちで過ごしていた時期に『最後のひとり』の執筆が始められた。1824 年 5 月 14 日の日記にメアリ・シェリーが自身が置かれた状況を、「最後のひとり」であると書き綴ったことは良く知られている。“The last man! Yes, I may well describe that solitary being’s feelings, feeling myself as the last relic of a beloved race, my companions, extinct before me —” (*Journal* 476-7)。この日の書き込みはこのように締めくくられている。“I do not remember ever having been so completely miserable as I am tonight —” (*Journal* 477)。この日に先立つ書き込みは 1 月 30 日のものであるが、そこで彼女は強く死を願っている。“I never prayed so heartily for death as now” (*Journal* 475)。上記の 5 月 14 日の書き込みの翌日

に、メアリ・シェリーは長年の友人であるジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron 1788-1824 以降バイロンと表記) がギリシアで亡くなったことを知る。『最後のひとり』を執筆中の作者は、かなり沈んだ気持ちであったことは間違いない。

従来の批評において、『最後のひとり』は十分に議論されてきたとは言い難い。リン・ウェルズ (Lynn Wells) はこの小説の受容について、1950年以前は批評的に顧みられることはなかったと述べている。“As has been noted, Mary Shelley’s *The Last Man* suffered from extreme critical neglect, to the point of near extinction, until its rescue from obsolescence.” (212)。それでも、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein* 1818, 1831) や『ヴァルパーガ』 (*Valperga: or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* 1823) に次いで取り上げられることの多い作品ではないだろうか。従来の批評においては、登場人物をパーシー・シェリーやバイロンとみなすような伝記的な解釈を試みるものが多い。伝記的な視点の流れにある批評の中でも、ロマン派の詩人が掲げた政治的理想主義との関連から小説を読み解く傾向が大きく、リー・ステレンバーグ (Lee Sterrenburg) は、『最後のひとり』をパーシー・シェリーの理想への批判であると論じている。ポール・A・カンター (Paul A. Cantor) は、イギリス帝国主義の拡大と支配下にあった諸国の逆襲という視点で論じ、アン・メラー (Anne K. Mellor) は、疫病をあらゆるイデオロギーの否定であると解釈している。また、後天性免疫不全症候群との関連で論じるような試みもみられる (Audrey A. Fisch)。

まず、『最後のひとり』が出版された歴史的な状況を概観するために、18世紀終わりから19世紀初頭における「残された一人」というテーマの含意を探りたい。フィオナ・J・スタフォード (Fiona J. Stafford) によると、革命と戦争の影響から深刻な経済の低迷が続いた19世紀初頭の困難な時代には、フランス革命に際して人々が抱いた希望や熱狂が失われ、急進的であった者も保守的であった者も、彼らの希望の見出せない惨状の原因を求めて1790年代を振

り返っていたのである。

The world had changed for ever and the Revolution in France serves as a watershed. In the difficult years of the early nineteenth century when Revolution and war were followed by severe economic depression, both radicals and conservatives looked back to the 1790s to find for causes for their misery and hopelessness. (162)

スタフォードの言葉が明らかにするのは、革命の希望、もしくは18世紀から19世紀への移行に伴い期待された至福千年の到来という希望を失い、それらの時代を生き残ったという感覚が人々の間に広まっていたことである。このような時代の風潮が、「最後のひとり」または「残された一人」という文学的なモチーフとして表れ、多くの人々の共感を博したのである。このような背景において、類似したテーマの作品が多く書かれたことも記しておかねばならない。この流れに沿った文学作品の例として、ロバート・サウジー (Robert Southey 1774-1843) の *Thalaba* (1801)、ウォルター・スコット (Walter Scott 1771-1832) の *The Lay of the Last Minstrel* (1805) やモーガン夫人 (Sydney, Lady Morgan 1781?-1859) の *The Wild Irish Girl* (1806) などが挙げられる。スコットの作品は非常に大きな成功を取っており、出版から5年で約1万5千部が売れた (Stafford 162)。また、1806年には Jean-Baptiste François Xavier Cousin de Grainville (1746-1805) による *Le Dernier Homme* の一部を翻訳したものである *The Last Man: A Romance in Futurity* がイギリスで匿名出版されている (Stafford 201)。

メアリ・シェリーの『最後のひとり』は1826年1月23日に出版されているが、それは「まずい時期」(Paley 107) であったといえる。その理由は、1823年以來からの、「歴史の終わり」または「地上に最後の生き残るひとりの人間」という文学的テーマの発案者についての騒動に続く出版であったからだ。トマ

ス・キャンベル (Thomas Campbell 1777-1844) が1823年にニュー・マンスリー・マガジン (*New Monthly Magazine*) に発表した『最後のひとり』 (“The Last Man”) という詩が、バイロンの詩である『ダークネス』 (“Darkness” (1616)) にテーマを負っているのではないかという1825年2月28日付けのエディンバラ・レビュー (*Edinburgh Review*) の指摘に対し、キャンベルがそもそもそのテーマをバイロンに提案したのは自分だという公開書簡を1825年3月24日付けのタイムズ (*The Times*) に発表するという事態に至っていた。この騒動に巻き込まれてトマス・ラヴェル・ベドウズ (Thomas Lovell Beddoes 1803-49) はさらに同名の戯曲の発表を取りやめたという経緯もある。メアリ・シェリーの『最後のひとり』出版の同年には、トマス・フッド (Thomas Hood 1799-1845) も地上に生き残る最後の一人について揶揄的なバラッドを発表している。そこでは生き残った二人の人間が裁判をして片方がもう片方を絞首刑にした後、最後のひとりがさみしさのあまり絞首刑を望むが、刑の執行において足を引く者が存在しないためにその望みが叶えられないことを嘆くものであり、このテーマがすでに滑稽なものに転じていたことがはっきりと窺える。同年にはジョン・マーティン (John Martin 1789-1854) が同じ題名の絵画を発表している。このような状況のなかに置かれたメアリ・シェリーの作品は、テーマ的な新鮮味に欠けたものであったことは間違いない。

それでは、「最後のひとり」という文学上のモチーフのオリジナリティーに関する騒動が起きた頃のイギリス文学界はどのような状況だったのだろうか。1822年のエディンバラ・レビューにおいてフランシス・ジェフェリー (Francis Jeffery 1773-1850) は「湖水派詩」(the Lake School Poetry) の終わりを宣言している (Stafford 198)。このことはジョン・キーツ (John Keats 1795-1821) とパーシー・シェリーに続いてバイロンが逝去したことで、人々に大きな説得力を持って確信された。このような感情の芽生えは、イギリスにおいて加速する産業革命に伴うロンドンへの人口集中と、地方都市の工業化が引き起こす伝統的な共同体の喪失と切り離して考えることはできないだろう。産業革命がもた

らす社会の機械化は、物質的な変化とともに人間の内面の構造の変化と切り離して考えることができないという点について、スタフォードは以下のように説明している。“The mechanization of society was not merely a matter of coal mines and cotton-mills, but a process that seemed to be altering the structure of society and the very minds of men.” (Stafford 207)。このように、文学を取り巻いていた近代化を加速するイギリス社会全体が、時代の変化を目のあたりにし、先立つ時代を生き残ったという感覚に満たされていたのだといえる。

メアリ・シェリーの『最後のひとり』は舞台を2073年に設定した未来小説で、王政から共和制へと移行し政治的に混乱したイギリスに、ナイル川の河畔で発生した疫病が忍びよる物語である。物語の前半では王の廃位に続くさまざまな政治的な混乱が繰り返される。しかし物語の後半では、どのような政治的な立場も疫病の流行を前に国を治めることはできない。物語は主人公のライオネル・ヴァーニー (Lionel Verney) の視点を通して描かれており、彼が最後に疫病を生き残り、人類の滅亡の顛末を振り返って書き記すという設定である。

三巻にわたる大変長い小説であるが、話の概要を簡単に見て行きたい。主な登場人物は以下の六人である。ヴァーニーとその妹パーディタ (Perdita)、廃位した王の嫡子であるエイドリアン・ウィンザー (Adrian Winsor) とその妹のアイドリス (Idris)、零落した貴族でギリシア独立戦争の英雄であるレイモンド (Lord Raymond)、そしてギリシア大使の娘イヴァドニ・ザイミー (Evadne Zaimi) である。

父親が前国王の裏切りによって破滅してしまったヴァーニーは、カンバーランドで妹と二人で孤児として育ち、王家に恨みを抱いていた。彼はエイドリアンがカンバーランドを訪問した際に悪行を働くが、それを寛大に許したエイドリアンに好感を持ち友人となる。ヴァーニーはそれまでの荒々しい気性を捨て、文明社会の一員となる。エイドリアンは王家の嫡子でありながら共和制を支持し、母親と対立していた。翌年レイモンドがギリシアより帰国し一躍時代

の寵児となる。彼は王党派支持者であり、アイドリスと結婚して国王となることを模索するも、パーディタとの愛のためにその野望を捨てる。エイドリアンはイヴァドニに思いを寄せていたが、イヴァドニはレイモンドを愛しており、二人はそれぞれ届かぬ愛情に苦しみ、エイドリアンは一時狂気に陥る。イヴァドニはイギリスを去り、ヴァーニーはアイドリスと、レイモンドはパーディタとそれぞれ結婚し、暫しの平和が訪れる。

しかし、イギリスで護国卿を決める選挙が始まると、レイモンドはかつての野心に目覚め、その地位を得る。護国卿となったレイモンドは国立美術館のデザイン画を描いたイヴァドニと再会する。彼女は祖国ギリシアに戻り結婚していたが、戦争ですべてを失ってしまったため、残りの人生を密かに愛するレイモンドに捧げようとイギリスへ戻っていたのであった。レイモンドは不遇の彼女を助けるうちに彼女と親密になってゆくが、イヴァドニの存在をパーディタに打ち明けることができない。夫が秘密を持つことを察知したパーディタは、それを許す事が出来ず、二人の心は離れてゆく。家庭内の不和に耐えられなくなったレイモンドは護国卿の地位を捨て、再びギリシア戦争へ参加するために旅立つ。密かにレイモンドの部隊に従軍していたイヴァドニは、死に際にレイモンドの死を予言する。レイモンドはその予言を受け入れて、疫病のために見捨てられたコンスタンティノーブルに勝利の旗を立てるために一人で入城して、イヴァドニの予言どおりに爆発に巻き込まれて死ぬ。

レイモンドとの最後の思い出の地であるギリシアに留まる決意をしたパーディタであったが、兄に無理やりイギリス行の船へ乗せられたため、船から身を投げて命を絶つ。ヴァーニーが一人で母国へ戻る頃には、疫病拡大の勢いはイギリスに迫っていた。とうとう疫病がイギリスに到達すると、護国卿であったものは逃げ出し、エイドリアンがその地位に就く。疫病の蔓延が原因で、あらゆる社会階級が崩壊し、エイドリアンが理想とする平等な社会が現れる。

2096年にヴァーニーとエイドリアンは生き残った数少ない仲間と共に、温暖な気候を求めてイギリスを離れる決意をする。イギリスを離れる前夜、息子

アルフレッドが病に倒れたアイドリスは錯乱して外へ飛び出し、ヴァーニーも後を追う。二人は疫病に感染し、ヴァーニーのみが回復する。一行がバリからスイスへと移動する間に、次々と仲間が命を落とし、最後にはヴァーニーとエイドリアン、ヴァーニーの息子イヴリン、レイモンドとパーディタの娘クレアラが生き残る。この頃疫病は、アルプスの山中で理由もなく消滅する。

その後イヴリンはチフスで命を落とし、残りの者を乗せてギリシアを目指した船が嵐にあい、エイドリアンとクレアラも死んでしまう。このようにヴァーニーは最後のひとりとなる。2100年の到来とともに、これまでの思い出を書き終えたヴァーニーは筆を置き、生き残った人類を探す旅に出る。

以上が小説の核心となる内容である。次に、物語を取り囲む外側の語りに目を向けたい。ヴァーニーの歴史の終わりの物語の前には、序が付けられており、そこにはヴァーニーの物語が1818年にナポリで序の語り手である「私」によって発見された経緯が書かれている。その語り手は友人とナポリ湾を渡りバイアの海岸で遺跡を見て歩き、クマエの女予言者であるシピラの洞窟へたどり着いた。そこにはいくつもの言語、古代語から語り手たちの時代のイタリア語や英語に至るまで、さまざまな言語によって何かが書かれた木の葉や樹皮が散らばっていた。そこに書かれているのはシピラの予言であり、最近の出来事や良く知られた人物の名前なども記されていた。二人は自分たちが解読できる断片を選択して持ち帰った。その後も二人は度々洞窟を訪れて判読できる断片を集め、語り手はそれらの判読に努めていたが、友人は途中で死んでしまう。伴侶の死による悲しみから目をそむける作業として、語り手は持ち帰った断片の解読に一人で励み、それらを一貫した物語の形に再創造したのがヴァーニーの物語となるのである。

このような序を付けることで、『最後のひとり』は一つの繰り返し行為を行っていることになる。リン・ウェルズは指摘している。それは喪失への反応としての書く行為であり、テキストとして再構築された失われた仲間は新たな欲望の対象、そして期待される読者として変容され蘇生されるという過程が繰り返



されているというのだ。“The introduction, then, repeats the same duplex pattern as the narrative it circumscribes: writing begins as a response to loss, with the absent companion reconstituted textually, and in turn transfigured, resurrected as a new object of desire, the projected reader.” (Wells 230)。明らかにパーシー・シェリーやバイロンであろうと推察できる登場人物を描くメアリ・シェリーにとっても、この小説の執筆の根底には、亡者たちを思い返しテキストとして再生させるという同様の欲望が潜んでいるであろう。

物語が死者たちを再生させるという行為の結果であるのと並行して、この序の導入は、小説内で起こる出来事がシビラの予言の断片を手に入れた別人の手によって再構築されたという設定を形成する。それは、語り直されているという点である物語が再生されているといえる。そして、序の語り手によるシビラの予言が書かれた断片の選択が恣意的であること、また、序の語り手自身が予言の内容を変形させたことを告白しているから、ここでの再生は同じ内容の複製ではないことが分かる。“Doubtless the leaves of the Cumæan Sibyl have suffered distortion and diminution of interest and excellence in my hands. My only excuse for thus transforming them, is that they were unintelligible in their pristine condition.” (*The Last Man* 8) このような反復は、J・ヒリス・ミラー (J. Hillis Miller) が『小説と反復—七つのイギリス小説』においてドゥルーズやベンヤミンに依拠して区別している二つの反復のうち、第二の反復、つまり差異を伴う反復の一例である。ミラーの説明する反復には二種類あり、一つは正確な複製であり第一の反復、または「プラトンの反復」と呼ばれている。本論で取り上げたいのは、第二の反復で「ニーチェ的反復」と呼ばれているものであり、反復されたものはその原型の正確な複製ではない。ミラーは以下のように説明する。「XはYを反復しているように見えるが、しかし実際には反復していない。少なくとも第一の種類の反復のようにしっかりと錨をおろしたような形では反復していない」(9-10)。つまり、第二の反復において、一見反復しているように見える二つの事柄は、差異を伴う反復なのである。あからさまに伝記的

である物語と、予言の複製であると主張されるヴァーニーの物語は、失われたものの再構築と見えながらも、原本とは異なる別の物語なのである。

このような反復が『最後のひとり』の中で幾度も生じていることを確認するために、まず、語り手が執筆にあたりおかれた状況が、差異を伴いながら反復しているという点に目を向けたい。メアリ・シェリーが執筆中に置かれていた状況と、物語中で最後のひとりとなるヴァーニーの境遇が類似していることは、メアリ・シェリー自身が日記の中で指摘している。ここではさらに、序の語り手が執筆に至る環境が、作家のそれと酷似している点を示す。序の語り手はメアリ・シェリー自身ではないかと思えるほど、その人が置かれた状況はメアリ・シェリーの伝記的な事実と符合している。しかし、その序の語り手には名前がなく、巧妙に性別も特定できないようになっており、メアリ・シェリーであると断定することは難しく、似ているが異なる別の語り手の回想録であるという位置づけに留まるものである。

序は語り手が1818年12月8日に友人とナポリ湾を渡ってバイアの海岸に散らばっている古代遺跡を訪ねたという記述から開始する。“I visited Naples in the year 1818. On the 8th of December of that year, my companion and I crossed the Bay, to visit the antiquities which are scattered on the shores of Baiæ...” (*The Last Man* 5)。その場所で序の語り手はシビラの予言を見つける。メアリ・シェリーの日記を参照すると、1818年12月8日に彼女は夫と共にバイア湾を訪れたことが分かる。彼女はその時の様子をこのように記している。“The Bay of Baiæ is beautiful but we are disappointed by the varuous places we visit.” (*Journal* 242)。加えて、『最後のひとり』執筆時には夫を失い悲嘆に暮れていたメアリ・シェリーであったが、序の語り手がシビラの予言からヴァーニーの物語を再構築している期間も同様に、序の語り手と一緒にバイアの洞窟を訪れた伴侶は亡くなり、語り手はさみしさを紛らわすために物語を完成させたのだ。

For awhile my labours were not solitary ; but that time is gone ; and, with the

selected and matchless companion of my toils, their dearest reward is also lost to me – ... My labours have cheered long hours of solitude, and taken me out of a world, which has averted its once benignant face from me, to one glowing with imagination and power.” (*The Last Man* 8)

序の語り手が友人の死を嘆く姿は執筆当時のメアリ・シェリー自身を彷彿させる。このように、意図的とも思える所作で序の語り手と自らの一致を示しているメアリ・シェリーに誘われて彼女の日記を確認しても、メアリ・シェリーと夫がクマエの女子言者であるシビラの洞窟へ行ったり、そこで予言の書の断片を発見したりした記録はない。さらには序の語り手とその伴侶の性別が巧みに隠されていることは、メアリ・シェリー自身が自分と序の語り手が同一視されることを避けているようでもある。序において書かれている内容は、作者が1818年の思い出を回顧しているようでありながら、架空の世界が混ざり込む異なる世界を描いた、差異を含んだ反復といえる。ウェルズも巧みな性別の隠匿において、メアリ・シェリーは読書による序の語り手と自身の同化を逃れていると指摘している(216)。ここに、自分の物語を手放したくないのと同様に、それは自分の物語ではないとも言いたげな、メアリ・シェリーの二律背反の感情を読みとることができる。このような二律背反の感情は物語全体に渡って見られるものであり、結末の両義性にまで及んでいる。

そのような両義性に満ちた物語を描くことは、メアリ・シェリーが夫に抱く怒りと悲哀を客観的に見つめる視点を与えるものであった。パーシー・シェリーの死後第一作となるこの小説の執筆は、メアリ・シェリーにとって自身が感じていた夫の喪失に伴う悲哀と彼に対して抱いている大きな怒りから距離を取ることを可能にしたと、メラは指摘している。“In psychological terms, the novel enabled Mary Shelley to gain distance from and some control over her profound anger and loss.” (Mellor 230)。このように自身が死者たちに抱く複雑な感情を客観視し物語化をすることは、メアリ・シェリーに喪失がもたらす悲

哀に一つの区切りをつけることを可能にし、未来を模索し始める契機を与えたのではないか。このような観点から、一般的には悲劇と解釈される物語の結末に明るい側面を見出したい。

まず、物語開始時におけるメアリ・シェリーの内面を確認したい。メアリ・シェリーが物語の語り手ヴァーニーのほかに序の語り手まで登場させて、死者たちを蘇らせるテキストの構築を繰り返す様は、反復脅迫ともいえるような執拗さである。このような過去を再現しようとする衝動、つまり「以前のある状態を回復しようとする」反復（フロイト 172）は、フロイト（Sigmund Freud）によれば、常に過去を志向し過去に向かい続けることで、体内回帰、つまり生命を得る以前、死を志す衝動なのである。

要するに、本能とは生命ある有機体に内在する衝迫であって、以前のある状態を回復しようとするものであろう。…もし例外なしの経験として、あらゆる生物は内的な理由から死んで無機物に還るという仮定が許されるなら、われわれはただ、あらゆる生物の目標は死であるとしかいいえない。…「自我本能」と性的本能、前者は死を、後者は生の継続を強いるものであるが、この両者をけわしい対立関係におくことになったのが、われわれのこれまでに得た結論である。（フロイト 172-77）

これは執筆当時のメアリ・シェリーの日記が裏付けるような、死を強く望む彼女の内面を映し出しているといえる。このような否定的な感情は、物語の進行に従っていかにか解消されてゆくのであろうか。そのような過程の解明にあたり、以下では、物語の結末の決定性の崩壊について考察する。

物語は予言であり、当初そこに示される未来は不可避であると感じられる。シビラによる予言が的確なものであることを示すように、そこには19世紀初頭に生きる序の語り手にとって最近起きたと思われる出来事も書かれていた。

“We could make out little by the dim light, but they seemed to contain prophecies,

detailed relations of events but lately passed ; names, now well known, but of modern date.” (*The Last Man* 7)。序の語り手の生きる時代の事まで予言しているからには、シビラの予言は正確なものであることが示され、21世紀にヴァーニーが体験する人類の歴史の最後も現実となるのではないかと考えられるくんだりである。その一方で、シビラの予言が書かれている断片は、本来さまざまな言語で書かれていたものであり、小説内で示されているのは、語り手たちが解読できる言語で書かれた予言の部分が示す内容に限られていることを、序の語り手は隠していない。

What appeared to us more astonishing, was that these writings were expressed in various languages : some unknown to my companion, ancient Chaldee, and Egyptian hieroglyphics, old as the Pyramids. Stranger still, some were in modern dialects, English and Italian.... We made a hasty selection of the leaves, whose writing one at least of us could understand.” (*The Last Man* 7)

さらに、シビラの予言は断片であったため、序の語り手により補われなければ読み物としての一貫性がなかったことも示されている。“I present the public with my latest discoveries in the slight Sibylline pages. Scattered and unconnected as they were, I have been obliged to add links, and model the work into a consistent form.” (*The Last Man* 8)。こうなると、小説内で示されている内容が、本当にシビラの予言であるのかは疑わしいと言える。序の語り手もシビラの予言は自分の創作物なのではないかという疑念を告白している。“Sometime I have thought, that, obscure and chaotic as they are, they owe their present form to me, their decipherer.” (*The Last Man* 8)。このような経緯は、序の語り手とは異なる言語をもつ者がシビラの予言を見つけたならば、異なる断片を選択し、異なる物語を作り出したであろうと思わせる。シビラの予言は序の語り手によって反復、復元されているという設定でありながら、実は再生産された物語は正確

な反復ではなく、原型との差異を内包した反復なのである。

このような差異を伴う反復の繰り返しは、登場人物が読者に容易に想像のつく実在の人物を物語内に再構築しているというレベルにおいても生じている。ある貴族のただ一人の生き残りで、ギリシア戦争に志願して国民的な英雄となったレイモンドは、ギリシアの独立のために命を落とす登場人物であり、容易にバイロンを連想させる人物である。廃位した前国王の嫡子でありながら共和主義者であり、極端な理想主義を掲げつつも現実に社会を変革する力には乏しいエイドリアンは、野蛮に育った語り手ヴァーニーに詩作や哲学に関する教育を施す者であり、小説を読み進むにつれて、メアリ・シェリーの夫パーシー・シェリーを想起させる。彼が溺死する点も、パーシー・シェリーへと関連付けられる点である。カンターも二人の登場人物の伝記的な関連について同様の指摘を行っている(201, 202)。しかし、二人の登場人物は実在の人物を強く想起させるものの、エイドリアンは結婚しないなど、伝記的な事実と反する点もあり、バイロンやパーシー・シェリーであると断定することは難しい。また、スタフォードはエイドリアンがメアリ・シェリーにとっての理想的なパーシー・シェリー像を反映しており、その他のパーシー・シェリーの要素、例えば他の女性との関係においてメアリ・シェリーを苦しめた側面は、レイモンドへ分割投影されていると論じている(224-25)。いずれにしても、確定できるほどではない程度に伝記的な要素が物語の中で再現されていると言えよう。

差異を伴う反復の繰り返すと、それぞれの語り手にとって『最後のひとり』を描いた動機となる癒しの効果は、どのような関係にあるのだろうか。物語を描く動機が、家族や友人の喪失を癒すものであったというメアリ・シェリーと序の語り手の心情についてはすでに述べた。さらにそれは、ヴァーニーがこの物語を執筆した理由でもある(ヴァーニーとメアリ・シェリーの結びつきについては、カンターも指摘している(205))。メアリ・シェリーと同様、ヴァーニーは最後の一人として取り残されたのちに、振り返って物語を書いており、友人たちを描くことはヴァーニーの心を静め、喪失の痛みを和らげる鎮静剤に

似た効果をもたらしたのである<sup>1)</sup> I had used this history as an opiate ; while it described my beloved friends, fresh with life and glowing with hope, active assistants on the scene, I was soothed ; there will be a more melancholy pleasure in painting the end of all. (Shelley 208)。

彼らの行く癒しのための語りに特徴的な事は、断片的であった過去の出来事の一つの意味をもつ連続した語りへと再編成することである。疫病の蔓延により一人取り残される只中においては、そのような経験の意味をはかりかねていたヴァーニーは、時と経験のおかげで、過去を全体として把握できる高さに立ったのだと述べている。そうした視点を得たことは、以前は次々と起こる出来事の関連性を見いだせず、モザイク状態のように断片的な事象が隣接していると感じていたヴァーニーに、過去を一つの意味を持つ全体として認識することを可能にする。

Time and experience have placed me on an height from which I can comprehend the past as a whole ; and in this way I must describe it, bringing forward the leading incidents, and disposing light and shade so as to form a picture in whose very darkness there will be harmony.... The vast annihilation that has swallowed all things – the voiceless solitude of the once busy earth – the lonely state of singleness which hems me in, has deprived even such details of their stinging reality, and mellowing the lurid tints of past anguish with poetic hues, I am able to escape from the mosaic of circumstance, by perceiving and reflecting back the grouping and combined colouring of the past. (Shelley 209)

出来事がモザイク状態のように断片化していたままでは、それらの事柄がもたらす苦悩から逃れることはできなかったヴァーニーは、それらの断片を「詩的な色合い」をもって「全体」として見渡し、「調和のある絵」のように再構築

することによって、苦痛から逃れて癒しを得る。つまり、調和を欠いた断片である原本を、想像力を駆使して一つの意味ある全体へと再構築することによって癒しを手に入れたのだ。

序の語り手においても同様の癒しの過程が経験されている。多くの言語で書かれ、散乱し断片的であったシビラの予言は、序の語り手によってつなぎ合わされ、首尾一貫した物語へと再構築された。“Scattered and unconnected as they were, I have been obliged to add links, and model the work into a consistent form.” (*The Last Man* 8)。そしてその作業は語り手に癒しを与えたのである。“Will my readers ask how I could find solace from the narration of misery and woeful change? This is one of the mysteries of our nature, which holds full sway over me, and from whose influence I cannot escape.” (*The Last Man* 8)。これらの癒しをもたらす作業において特筆すべき点は、癒しをもたらす効果を得るためには、再構築された語りが原本を正確に再現している必要はないという点である。意味をなさず断片的であったものが、語り手の持つ想像力の力により、一つの意味を成す全体として再構築されればそれでよいのだ。再構築された物語は、原本とは全く異なるものである可能性さえ生じている。物語中で原本が読者に示されることはないが、それぞれの語り手による告白と語りの構造から、差異を含む反復、再創造が生じていることは明らかである。

このような幾重にも積み重ねられた差異を含む反復構造は、小説の書名のもつ結末の決定性を覆すものである。全体が予言であり、未来はすでに語られてしまったという構造がもたらす閉塞感とともに、書名がすでに結末を明示してしまっていることは、読者の自由な期待を制限するものである。また、物語がヴァーニーの回顧である点も、物語の成り行きが不可避の悲劇であることを強調している。その上、物語中盤でレイモンドがイヴァドニの予言を受け入れ自ら死に向かう場面は、予言の拘束力を強く印象付ける。また、それは、小説中にたびたび言及される必然性の概念と相まって、物語の悲劇性を高揚させている。ヴァーニーは自分の運命を司る必然の力に対しての無力感をこのように吐



露する。

Mother of the world! Servant of the Omnipotent! eternal, changeless  
Necessity! who with busy fingers sittest ever weaving the indissoluble chain  
of events! – I will not murmur at thy acts. If my human mind cannot  
acknowledge that all that is, is right; yet since what is, must be, I will sit  
amidst the ruins and smile. (Shelley 310)<sup>2)</sup>

一方で、繰り返される差異を含む語りの反復の構造は、このように不可避の  
で悲劇的な状態からの抜け道を提供している。ここで再構築されている物語  
は、恣意的に選ばれたエピソードを整え、それぞれの語り手が自らの想像力を  
駆使して作り上げた物語であることを思い出したい。それぞれの語り手にとっ  
て物語を描くことは、現実においては再会が不可能である人物や事柄と回顧と  
いう行為の中で対峙し、想像力を駆使して一連の事象についてその時には見る  
ことのできなかつた因果関係を見出し、過去の断片を意味のある一つの語りへ  
と再構築することである。そうした中で、それぞれの出来事に新しい意味付け  
を行い、語り手は喪失を受け入れ可能なものへと変容させていくのだ。つま  
り、この変容の過程でシビラの予言はその効力を失い、それぞれの語り手  
にとっての新しい物語が創造されているのだ。

最後に作家メアリ・シェリーが現実をどのように再構築したのかについて、  
物語の両義性という観点から考察したい。再構築された物語の中で、メアリ・  
シェリーは夫の人物像であるエイドリアンとバイロンの人物像であるレイモン  
ドにどのような評価を与えているのだろうか。そして、そのような評価はメア  
リ・シェリーの内面にどのような変化をもたらすのだろうか。

カリ・E・ロック (Kari E. Lokke) は『最後のひとり』の中に、エロスとタ  
ナトスの葛藤を見出している。エロスとタナトスという言葉はプラトンに由来  
するが、それを発展させたフロイトの二つの欲動についての言葉は先に引用し

た通りである。そこでフロイトが「自我本能」と呼ぶ欲動は、いわゆる「死の欲動」(小林参照)と呼ばれるものであり、ロックにおいてはタナトスとされている。『最後のひとり』においては、死の欲動の圧倒的な勝利が描かれており、レイモンドにおいては死の欲動の表出が顕著である。“Both Evadne and Raymond incarnate a death drive, a will to power, in its most explicit and destructive form – limitless ambition, untamed pride, and uncontrollable passion.” (Lokke 120)。レイモンドは一旦パーディタと家庭を築きエロスの力に導かれて生命保存を優先するかに見えたが、イヴァドニの誘発する死の欲動に抗うことはできず、自らコンスタンティノープルに赴き命を落とす。レイモンドの死に際して、ヴァーニーは彼がアテネのタイモンとなり怒りを爆発させる夢を見るのは(160)、レイモンドの愛情に対して冷酷に対応したパーディタへの批判であると読み取れる。これはメアリ・シェリー自身が夫の晩年に冷たい態度を取っていたことに対する後悔の表れとも見て取れる。また、ヴァーニーの夢で、額に疫病の印を付けたレイモンドが地上をのみ込むほどまでに膨れ上がることは、バイロンの過剰な自意識が多くの人を不幸にしたというメアリ・シェリーの評価の表れなのではないか。一方で表面的には疫病の化身となるレイモンドであるが、主要な登場人物の中で疫病で命を落とすものは比較的少数である点から、メアリ・シェリーのエイドリアンに対する批判の方がより強烈なのではないか。

エイドリアンはエロスの徹底的な欠如において死の欲動に突き動かされる人物である。彼は私欲のない善性の権化として描かれている。これは亡き夫を限りなく理想化しようとするメアリ・シェリーの試みであるが、その描写の中にも抑えきれない夫への批判が表出している。彼は青年期にエヴァドニを愛しエロスに目覚めるが、タナトスの化身ともいえる彼女に愛を受け入れてもらえなかったことで、象徴的に去勢されてしまう。以降彼は異性との関係に興味を示す事も関係を構築することもない。エイドリアンは虚弱で肉体性を欠いた登場人物である。ここに夫とほかの女性との関係を描くことを拒否し、彼を性的本

能、つまり生きようとする欲動から締め出し、死の欲動の赴くままに見殺しにする残酷なメアリ・シェリーの無意識が垣間見られるだろう。エイドリアンは無力な登場人物であり、最後の女性登場人物であるクレアラの死の責任を負わされることで、間接的に彼らの再生の望みを奪った張本人となる。これは、娘クレアラの死について夫を許す事が出来ないメアリ・シェリーの内面でもある。エイドリアンはクレアラに対してギリシアが目の前の海の向こうであることをささやく。そこでクレアラは両親の墓のあるギリシアへ行きたいという願いを口にする。海の旅は危険だという理由でヴァーニーは反対するが、エイドリアンは無責任にも彼の反対を押し切る。

“That land,” said Adrian, “tinged with the last glories of the day, is Greece.” Greece! The sound had a responsive chord in the bosom of Clara. She vehemently reminded us that we had promised to take her once again to Greece, to the tomb of her parents.... I objected the dangers of ocean, ... Adrian, who was delighted with Clara’s proposal, obviated these objections.... Adrian said, “Well, though it is not exactly what you wish, yet consent, to please me” – I could no longer refuse.... (*The Last Man* 340-41)

このようにエイドリアンは気軽に友人たちを死の航海へ導き、嵐に見舞われる。書名により既に結末を知らされている読者には、嵐の中クレアラに対して掛けられたエイドリアンの以下の言葉ほど空虚に響くものはない。“Do you fear, sweet girl? O, do not fear, we shall soon be on shore!” (*The Last Man* 342)。さらに最後のひとりとして生き残るヴァーニーは泳ぐことができるのに対して、エイドリアンは泳ぎが得意でないことが示される。“I was myself an excellent swimmer ... Adrian also could swim – but the weakness of his frame prevented him from feeling pleasure in the exercise, or acquiring any great expertness.” (*The Last Man* 343)。当然のようにエイドリアンは自身もクレア

ラも救うことはできない。一度エイドリアンは嵐の中でクレアラを腕に抱いていたところを目撃される。“The lightning shewed me the poor girl half buried in the water at the bottom of the boat; as she was sinking in it Adrian caught her up, and sustained her in his arms.” (*The Last Man* 344)。しかしヴァーニーが仲間「たち」を探して目を転じた時、最後に目にしたエイドリアンの姿は「一人」でオールにしがみついたものであった。“I endeavoured during each flash to discover any appearance of my companions. I thought I saw Adrian at no great distance from me, clinging to an oar;” (*The Last Man* 344)。この一瞥は、エイドリアンがその高邁な言葉とは裏腹に、それらを実行する能力を欠いていることを強く印象付ける。

上記の難破騒動の中、ヴァーニーは突然強い性的本能、つまり生きる意志に目覚め海上での嵐を一人だけ生き残る。“As that hope failed, instinctive love of life animated me, and feelings of contention, as if a hostile will combated with mine.” (*The Last Man* 344)。この記述にはヴァーニーの内面で葛藤する二つの欲動を見る事が出来る。こうしてヴァーニーは生き残り、死を望みながらも、死者たちに向かって物語を書き始める。レイモンドやエイドリアンとして表象されるパーシー・シェリーやパイロンといった亡者に対して、彼らの没落と彼らに対する抗議を書き示した物語を蘇って読むようにと献辞において要請している点には、メアリ・シェリーの彼らに対する大きな怒りを読みとることができる。“DEDICATION / TO THE ILLUSTRIOUS DEAD. / SHADOWS, ARISE, AND READ YOUR FALL! / BEHOLD THE HISTORY OF THE LAST MAN.” (*The Last Man* 362)。その一方で、メアリ・シェリーの人格であるヴァーニーは物語内でレイモンドやエイドリアンに献身的に使い、理解を示し、彼らに対する批判を行うことはない。ここにメアリ・シェリーが死者たちに抱く両義的な心理を認めることができる。

最後に、このような物語を描くことで、喪失の傷を癒し未来へ向かおうとするメアリ・シェリーの意識を確認したい。一年の月日をかけて人類の歴史の終

わりを書き終えたヴァーニーの心境には肯定的な変化が訪れ、心機一転ローマを離れようと決心する。“A hope of amelioration always attends on change of place, which would even lighten the burthen of my life. I had been a fool to remain in Rome all this time.” (*The Last Man* 363)。ヴァーニーは自分がローマに留まり過去を振り返り続け、喪失から逃れられなくなっていたことを客観視し、新しい人生を求める旅に出るのだ。ここでローマはパーシー・シェリーの墓がある場所である点にも注意しておきたい。常に過去を振り返っていたヴァーニーの視線は、ここからは未来へと投げかけられる。ヴァーニーが小さな帆船で海へ乗り出す最終場面は、探しているもの、つまり友を見つけるかもしれないという希望が動機となっている。“in some place I touch at, I may find what I seek – a companion” (*The Last Man* 364)。ここに過去を物語る行為によって絶望から抜け出した彼の内面の変化を見ることができる。

結末の解釈には両義性が残ると考えられる。小説最後の言葉は“the LAST MAN” (*The Last Man* 365) と大文字で記しているため、実際に人類最後のひとりとなり、未来に希望はないとする見方もあるだろう。しかし、物語全体はヴァーニーの一人称の語りであり、彼の主観から抜け出すことはできない。ヴァーニーが世界全体を見渡す視点を持ちえないことは、ヴァーニーが結末に示す友を見つける希望の根拠となるといえる。さらに、最終場面においては、これまで観察者として歴史を記録する主体であったヴァーニーは、高みから見られる客体へとその立ち位置を変化させている。“Thus around the shores of deserted earth, while the sun is high, and the moon waxes or wanes, angels, the spirits of the dead, and the ever-open eye of the Supreme, will behold the tiny bark, freighted with Verney” (*The Last Man* 365)。これは、彼の主観の外へと出てゆく仕草であり、彼の知っている者たちは誰もいない彼が最後のひとりのように思える彼の世界から、未知の地平へと旅立っているのだといえる。これ以後のヴァーニーの人生を知る術は、読者にはない。これは『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein; or the Modern Prometheus* 1818) において、読者の視界から消

え去る生き物に似ている。生き物が本当に命を絶ったのか読者は知ることができない。また、ヴァーニーが物語を終えることで、過去へと常に意識を返そうとする死の欲動の呪縛から抜け出し、変化を求め未知へと踏み出す行為は、性的本能、つまり生命を維持しようという欲望への傾倒であるといえる。ヴァーニーが一時自らの境遇を比較するのはロビンソン・クルーソーであり、これは彼が最終的には人間社会へ復帰することを暗示しているともとれるのではないか<sup>3)</sup>

このような最後のひとりではないかもしれないという希望と共に比較的開いた結末の可能性を残すという解釈は、この物語がシビラの予言であるという点においてさらに説得力を増すものとなる。ウェルギリウス（Virgil 紀元前 70-19）の『アエネーイス』（*The Aeneid*）において、主人公アイネアースはパイアに赴きシビラに神託を乞う（第6歌）。シビラと共に冥界へと降りてゆき死者の国を見て回ったアイネアースは、最後にエリュシオンにたどりつく。そこで自らの亡き父親と再会し、浄化された魂が再び転生することを知る。その場にいたのは、未来において自らの子孫として生まれ来る幾多の魂であった。また、シビラからは自分とその末裔はローマ人となり、その国は多に繁栄すると告げられるのだ。

このように過去を想像力により再構築し、喪失による絶望を癒し未来への希望を暗示するという流れは、この小説のひとつの特徴となっている。当時ありふれたものであった歴史の終焉についての終末論的な悲劇ではなく、むしろそのような結末を覆す構造を持つ点において、メアリ・シェリーの『最後のひとり』は他の作品とは一線を画していると評価できる。また、それはパーシー・シェリーとバイロン等と過ごした波乱の日々の後に突然一人で取り残されたけれども、パーシー・フローレンスという小さな希望と共に生きてゆくという選択肢しか与えられなかったメアリ・シェリーが<sup>4)</sup>、彼らと過ごした一時期を幾度も振り返り、事柄の意義づけする作業を通して一つの物語として受け入れようとし、生きる希望を見出そうとする自身の精神の動きを表象した、メアリ・

シェリーならではの独創的な構造であると評価できる。

### 参 考 文 献

- Brewer, William D. "Mary Shelley on the Therapeutic Value of Language." *PLL* 30.4 (1994) : 387-406. Print.
- Conger, Syndy M. et al. *Iconoclastic Departures : Mary Shelley After Frankenstein*. London : Associated University Presses, 1997. Print.
- Fisch, Audrey A. "Plaguering Politics : AIDS, Deconstruction, and *The Last Man*." Fisch 267-286.
- Fisch, Audrey A. et. al. *The Other Mary Shelley : Beyond 'Frankenstein'*. Oxford : Oxford UP, 1993.
- Lokke, Kari E. "The Last Man." *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Ed. Esther Schor. Cambridge : Cambridge UP, 2003. 116-34. Print.
- Mellor, Anne K. *Mary Shelley : Her Life, Her Fiction, Her Monsters*. New York : Routledge, 1988. Print.
- Paley, Morton D. '*The Last Man*' : *Apocalypse Without Millennium*. Fisch. 107-123.
- Shelley, Mary. *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Eds. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore and London : Johns Hopkins UP, 1987. Print.
- . *The Last Man. The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol. 4. Eds. Jane Blumberg and Nora Crook. London : Pickering, 1996. Print.
- Stafford, Fiona J. *The Last of the Race : The Growth of a Myth from Milton to Darwin*. Oxford : Clarendon P, 1994. Print.
- Sterrenburg, Lee. *The Last Man : Anatomy of Failed Revolution. Nineteenth-Century Fiction* 33.3 (1978) : 324-47. Print.
- Wells, Lynn. "Triumph of Death : Reading and Narrative in Mary Shelley's *The Last Man*." Conger 212-234.
- 小川公代「意識から無意識へ 夢・動物・おとぎ話」『文学理論をひらく』木谷巖編集 北樹出版 2014年 14-38。出版物。
- 小林敏明『フロイト講義 〈死の欲動〉を読む』せりか書房 2012年。出版物。
- シェリー, メアリ『最後のひとり』森道子他訳 英宝社 2007年。出版物。
- ミラー, J・ヒリス『小説と反復—七つのイギリス小説』上村盛人他訳 英宝社 1991年。出版物。
- フロイト, ジークムント「快樂原則の彼岸」(1920)『フロイト著作集6』井村恒郎他訳 京都 人文書院 1970年 150-94。出版物。

## 註

- 1) シェリーの作品全般にわたる言語化と癒しの関係については、ウィリアム・D・ブリューワー (William D. Brewer) がラカンの精神分析理論との関係から論じている。
- 2) 必然性の概念はメアリ・シェリーの父ゴドウィンがその著書『政治的正義』のなかで人間の持ちうる自由意思との関係で詳しく論じている重要な概念である。ピッカリング版の *The Last Man* の脚注では、この部分の「必然」の概念について、パーシー・シェリーの『マブの女王』への言及であると指摘している。
- 3) ロビンソン・クルーソー初版 (1719) の表題は以下の通りである。The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner: Who lived Eight and Twenty Years, all alone in an un-inhabited Island on the Coast of America, near the Mouth of the Great River of Oroonoke; Having been cast on Shore by Shipwreck, wherein all the Men perished but himself. With An Account how he was at last as strangely deliver'd by Pyrates
- 4) このようなシェリーの内面は以下のジャーナルへの書き込みにおいて認められる。

The Journal of Sorrow -

Begun 1822

But for my Child it could not

End too soon.

(Front Page of the Journal, Book IV *Journal* 428)

\* 本稿は松山大学国内研究 (2012年9月~2013年8月) の成果である。

\* この論文は2014年11月29日の日本シェリー研究センター第23回大会 (於東京大学) におけるシンポジウム発表に大幅な修正・加筆を加えたものである。